

お母さんの耳たぶ

よるいねむりをすると、お父さんがぼくを
ふとんにはこんでいく。

さいしょはお父さんといっしょにねる。

朝目をさますと、ぼくはいつのまにか、ベッ

ドのお母さんのよこでねている。

そして、ぼくの手はお母さんの耳たぶをつ

まんている。

いつも同じみたいだ。

「また、いどうしたな。」

と、お父さんが言っている。

お母さんは何も言わないけれど、ニコニコ

してうれしそうだ。

だれかがぼくをはこんだのか？

よく思い出してみると、よなかに自分であ
るいていったような気もする。

ねぼけたぼくがお母さんの耳たぶにすいよ

せられたのかな？

目をさましたとき、お父さんの耳たぶをつ

まんていたことはなかった。

自分でもよく分からないけれど、お母さん

の耳たぶはやわらかくて気もちいい。

でもすこしはずかしいから、なにもおぼえ

ていないことにしておこう。